

河川工事での失敗

1. 工事内容

当工事は、平成19年3月から20年3月にかけて、豪雨災害の復旧工事として旧堤を残したまま新堤を構築した後、旧堤を撤去する工事であった。

低水護岸は鋼矢板打設後、掘削し捨石を投入する工法で、高水護岸は鋼矢板を基礎とし張ブロックを布設する工法であった。

2. 工事の経緯

当初工期は平成19年3月着工であったが、用地交渉の遅れ等で6月になっても当初予定箇所の施工が出来ない状態だった為、やむなく低水護岸の施工を後にし、鋼矢板の打設を行い高水護岸の張ブロックの施工を先に行った。

当初よりある程度の鋼矢板の偏移を予想していたので、低水護岸から行うべきだとは判っていたが工期がなかったため、多少のリスクは覚悟して施工に踏みきった。

障害も解決し低水護岸の掘削を開始したところ、予想以上に土質が悪く鋼矢板の偏移が2～3cm程度で納まる予定が8～10cmまで拡大した。そのことにより、高水護岸の地盤が沈下し張ブロックも同時に沈下した。

ステップ幅1.0m、延長100mの区間を、低水護岸完成後伏せ直しを行った。

3. 反省点

まず、試掘等を実施し土質の確認を確実に行っておくべきだった。また、鋼矢板の掘削時の偏心量を土質の悪かった場合を想定して、計算しておくべきだった。



写真-1 補修前



写真-2 補修後